

フレールベルの音楽教育について

著者	高牧 恵里
著者(英)	Takamaki Eri
雑誌名	武蔵野大学教職研究センター紀要
号	3
ページ	65-76
発行年	2015-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000872/

フーベルの音楽教育について

About Fröbel's Music Education

高 牧 恵 里^{*}
Eri Takamaki

はじめに

現在、幼稚園教諭・保育士の教員養成の学生の「音楽基礎」「器楽」の指導に携わっている。これまで多数の学生を指導し、社会に送り込んでいるが、保育、教育の現場で教えられている「音楽教育」が、果たして子どもたちにとって良いものであったのか、音楽が人格を育てるということより、「歌える」、「弾ける」技術中心の教育になっていないか、常に考えさせられる。

そこで、幼児教育の理念と実践を実現すべく、幼稚園創立に力を注いだフーベル（Friedrich Fröbel 1782～1852）の音楽教育について、検討していきたい。

フーベルは、『人間の教育』の中において、『表現としての芸術においては、音楽であり、主として唱歌である。』と述べており、『母の歌と愛撫の歌』という歌を含んだ著作も残している。また、『幼稚園教育学』では、子どもたちへ「恩物」という遊具を使って指導している記述がある。先生が歌いながら子どもたちを遊具へ導いている記述が多数見られるが、フーベルが保育において「音楽」を重視していたことは、そこから見て取れる。

それに基づき、現代の日本におけるよりよい幼児に対する音楽教育について、検証する必要があると考える。

彼の理想とする幼稚園教育の中で、「音楽教育」をどのように位置づけていたか、『幼稚園教育学』を通して、検証したい。

1. 研究の目的

本研究は、フーベルの『人間の教育』の中の「全体の基礎づけ」より、音楽教育に深く関わると思われる項目を選び、これを実施する部分を『幼稚園教育学』等、他の著作より抽出する。そしてこれらの項目を検討することにより、現場で実施されるべき幼児の音楽教育の原点に立ち返ることを目的とする。

* 武蔵野大学教職研究センター

2. 研究の対象と方法

『人間の教育』第一篇「全体の基礎づけ」と『幼稚園教育学』、『母の歌と愛撫の歌』から呼応するフレーベルの指導内容を抽出し、検討する。

3. フレーベルについて

フレーベルは、1782年、オーベルヴァイスバッハに生まれた。早くに母親を亡くし、牧師をしていた父、兄姉等により育てられる。教会の公務で忙しい父は、再婚したが、継子が生まれてから、新しい母親から冷たく扱われるようになり、孤独な日々を過ごすことになる。

彼の転機は、彼の境遇を悟った母の兄ホフマンが、シュタットイルムに連れて行き、伯父の家の穏やかな環境の中で幸せな日々を過ごしたことだった。彼は、父から読み書き算数の基礎の手ほどきは受けており、村の小学校にも通っていたが、シュタットイルムでは、町の小学校に入り、学んだ。そこでは、彼が最も必要とする友達を見つけることができた。

その後、堅信礼により、彼は学問の道より実際の道を目指すことになり、林務官の見習いとして、ヴィッツの師弟となった。ここで、昆虫や植物などの採取をすることにより、自然科学に興味を持つことになった。修業期間後に、大学で自然科学を勉強する機会を得ることになり、特に鉱物学を熱心に取り組んだ。しかし、父親の体調が悪くなり、自宅に帰宅、牧師の仕事等を手伝ったりしたが、1802年に父親は亡くなった。その後、彼はバンベルグで、測量技師として仕事に取り組むことになった。農場の測量を始めたところで、イェナ大学での知人と出会い、交流し始めた。二人は、シェリングの『ブルーノもしくは事物の神的・自然的原理¹⁾』などに没頭し、化学や自然科学の知識を得ていった。

またその翌年には、メクレンブルグでデーヴィッツ卿の「秘書の肩書を持った経理係」として働き、計算分野にも才能を見出すが、建築芸術にも傾倒し、ドイツの建築芸術の精神を学んだ。その頃、伯父ホフマンがなくなり、少量の財産を分け置き、フランクフルト・アン・マインに行き、建築士の職を探し始める²⁾。

フレーベルは、自分の職務教育は、人生の目的と考えていた。その頃、他人の人生の目的のための職業教育を高く掲げ、教師と学校の崇高な使命のために頑張っていたペスタロッチ門下生のグルナーと出会う。当時自分が家庭教師をしていた子どもたちと一緒に、ペスタロッチのもとで生活し、学ぶことになった。彼はペスタロッチの教育を実践していたが、反対に疑問も生じてきた。それは、彼の教えが初等教育向きで、10歳以上の子どもには向かないと考えたからであった。そのことから、2年でペスタロッチの元を離れることとなった。

1813年から2年間は、ドイツ解放戦争に参加し、大変な時代を過ごす。この体験は、フレーベルの内面に影響を与え、のちに「ドイツ学園」、「ドイツ幼稚園」の設立活動に導かれていくのであった³⁾。

戦争から帰還し、恩師であるヴァイス教授からの紹介で、ベルリン大学鉱物学博物館の助手を務めることになる。鉱物に囲まれた環境で、鉱物の結晶の幾何学的な形に出会い、規則的な繰り返しに気づくことになる。そして、「自然と人間との間に同一の法則が支配していることを明ら

かにし、表現すべきであり、またとうぜんそうでなければならない。⁴」と後に発表する『人間の教育』という偉大な思想が、さまざまな経験を経て生まれてきたのである。

1816年にグリースハイムでの教育活動を開始した。後にカイルハウに移転し、友人であるミッドENDORFとランゲタールと共にカイルハウ学園を設立することとなる。そこでは、数々の小論文を発表している。

カイルハウ学園で教育を始めたが、存続が危ぶまれたため、スイスのヴァルテンゼーに移り、学園をつくる。その後も、さまざまな土地で宗教上の反対等にあい、難航した。そこで、政府に保護を求め、さらに「人間の教育の根本的特質」を提出し、教育者に助言を与えた。政府の保護の結果として、学園が持ちこたえられた。その後も師範学校の設立に着手し、継続教育課程の講座指導に当たった。終了後は、孤児院の運営を引き受けた。

ブランケンブルグの「幼児期と青少年期のための作業衝動の育成施設」をつくり、マイヤーの「書誌学研究所」から「恩物」を発表していく。

そして、1840年に育成施設を統合して「一般ドイツ幼稚園」を開設した。

1844年に『母の歌と愛撫の歌』を発表した。ドイツ幼稚園を開設すべく、ドイツ西部を回る。ドイツ内で幼稚園の教員養成の講習を開くなど、幼稚園教育に力を注いだ。1851年にプロイセン政府から幼稚園禁止令が発せられた。幼稚園の中に自由教団が設立した幼稚園もあり、政府の信仰に対する不寛容さなどが原因とされている。そのような中、フレーベルはいろいろな措置を取ったが、なかなか改善されないまま、1852年6月21日に70歳で亡くなった。

4. フレーベルの教育について

フレーベルは、1826年カイルハウの普遍的ドイツ学園における教育と授業と教授技術の取り組みについて書かれた『人間の教育』という著作において、教育の根本となる哲学を発表している。

『人間の教育』の冒頭、「全体の基礎付け」において、次のように述べている。「すべてのもののなかに、永遠の法則が宿り、働き、かつ支配している。この法則は、外なるもの、すなわち自然の中にも、内なるもの、すなわち精神の中にも、自然と精神を統一するもの、すなわち生命の中にも、つねに同様に明瞭に、かつ判明に現れてきたし、またげんに現れている。(中略) このすべてのものを支配する法則の根柢にすべてのものを動かし、それ自身において、明白である、生きた、自己自身を知る、それゆえに永遠に存在する統一者が必然的に存在している。⁵」

すべてのものを統一するものが神であるとし、万物の法則を、意識し、思惟しつつ、自己決定を持って自己の生命の中で表現させることができることが教育であるとしている。

人、自然、すべてのものを存在させる全宇宙を統括しているものが神的な存在である。人間には、神的な存在である物事の本質を意識し、認識し、表現させることのできる法則が内在している。その法則を人間から自己の意思により、表現を促すこと、その方法こそが教育であるとしている。知識として人間を知ること、「教育学」、人間としての自覚と使命へ導く方法を「教育論」、これらの知識を運用していくことを「教育技術」としている。これらをまとめることにより、知的なものが生まれる。自分から他へ知識を求めることは、教育を他人に意識的に求めていること

になり、「知恵の二重の行為である。⁶」としており、向上心を養われることにつながる。よって、人と自然、神的なものが融合することを認識し、人を高めていかなければならない。

5. フレーベルの音楽教育について

フレーベルの著書の中で、音楽を含む教育活動について述べられているものは、次のようなものを挙げるができる。

1) 『母の歌と愛撫の歌』

1844年にフレーベルにより発表される。女性の持つ母性本能と芸術的な面を引き出し、子どもに愛情深く、情操豊かに育てることにより、母親、保育者の気高き精神を伝えることをこの本の目的とした。

フレーベルは、「自然に即した教育のための出発点である。⁷」としており、子どもが健全に成長していくために、母親がどのように育て支えていくべきか、方法論として示している。

『母の歌と愛撫の歌』の中の作品は、乳児から幼児の遊びの中で、両手足や耳などの感覚器官を使う遊戯を、歌で導いている。また、人の教育に大切な言葉が思考力を育てるため、歌詞が母親の歌声により、子どもに伝えられることが、子どもの発達により重要なのである。

その中の「塔の風見」では、絵本の上方にわたりを想像させるように、手が描かれている。手の動きにより、下方の絵の中の木の葉などが風で動く様子を子どもと観察し、子どもに目に見えない力が働いていることを対話しながら伝えていくことが、理解させるのである⁸。

音楽が言葉や母による愛撫などと共に用いられることが大切であるということも重ねて指摘している。

2) 『幼稚園教育学』

フレーベルは、1844年以降、ドイツ国内に学園を設立していったが、ある思想に着地した。それは、この世に生を受けてからの教育が、家庭内の教育、最初の教育、生活の教育を与えられることがいかに大事かということであった。その教育こそ正しく理解され、取り扱われることが、真の教育へ導かれることに願いを込めて書かれた。

子どもの要求に対し、遊具・作業遊具を提示し、基礎的な教えを踏まえて、注意深く自然や生命を観察できるよう導くことにより、要求を満たすことができると考えている。

子どもが、内なる思いに目覚め、夢中になる高まりが感情や知覚と一致して活動しようとすることを正しく理解し、育まなければならない。また、外から受ける感覚を体内で感じる器官があるが、器官を通じて表現する身体を持っている。子どもがその感覚に目覚めると、音を感じたり、音の区別ができたり、音の聞こえる方向に注意を向けたりするだろう⁹。

大人が遊具の教えと陶冶（人間形成）の方法を子どもたちの心情や精神、生命にふさわしいものとして伝え、結果として、子どもたちと共に生きようということが目的である¹⁰。

3) 『アルテンシュタインにおける遊戯祭』

1850年8月4日にアルテンシュタインにて遊戯祭が開催された。

この遊戯祭には、ザルツンゲン市の全教師と、いろいろな生活環境やいろいろな学年の幼児や生徒、約300人が参加した。

遊戯祭は、子どもたちの健全な成長を助けるように、子どもたち個々の教育と能力に応じて、課題をこなし、全体の統一を計りながら行進やお遊戯を披露することだった。このことは、成長中の幼児や少年、また幼児や少年でまだ教育を受けていない人々に、遊戯祭をよく観察させ、教育の必要性を理解してもらうためであった。

遊戯祭に参加する子どもたちは、年齢や身長に応じて分けられ、四人ずつの縦隊がつくられ、さまざまな土地の子どもたちと合流しながら行進を始めた。そこで、子どもたち皆で同じ歌を歌い、拍子やリズムを取ったりしながら行進した。歌ったり、拍子やリズムを取る音楽活動は、現代の音楽教育のリトミックに通じる一例として考えられる。

遊戯場の入口に掲げられた「子どもの遊びにはしばしば深い意味がある」という言葉は、この遊戯祭で伝えたかった理念そのもので、この理念の表現と実例は遊戯場の中で繰り返された。これは、子ども自身の意思をもった活動と全体を統一した共同作業であった¹¹。

4. 『人間の教育』の根本理念である「全体の基礎づけ」より、具体的方法論について

「全体の基礎づけ」に含まれている音楽教育と関連の深い項目を選び出し、「幼稚園教育学」の中に記載されている事例を基に検証した。

「全体の基礎づけ」を要約した中からいくつかを選び、検証している。

「全体の基礎づけ」の理念が、「幼稚園教育学」の実践例の中にどのように実現されているかを検証することが大変重要であるからである。

1) 全体の基礎づけ②

意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺戟し、指導して、その内的な法則をその神秘的なものを、意識的に、また自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法と手段を提示すること、これが、人間の教育である。

(事例) フレーベル全集第四巻「幼稚園教育学」 第四章 ボール

ひもをつるしたボールを幼児に軽く続けて引っ張らせたあと、その手から離してやる。それと同時に、「ピム、パム、ピム、パウム！」「ティック、タック、ティック、タック」、「あっち、こっち、あっち、こっち」と言いながらボールの運動を特徴づけてやる。まことに単純なこの遊びは、早くもそれを他の音や語やその他のものと結びつけることによって、いろいろに変化させることができる。

そのあと、次のように展開する。

- ・ボールを静止させる。

- ・上へ下へとボールをひもで上下に動かす。
- ・ボールを円形に左右に振り回す。
- ・同じ所にボールを垂直の方向に落とし、「たん、とん、とん！」と言う。
- ・「ボール、とべ！」急に下に落としたボールをその弾力で飛び上げながら言う。
- ・「ボールをとばない！」と言い、ボールを休ませたり、また飛び上がらせたりする。
- ・「まわれ、まわれ！」「はやく、はやく！」ボールをかわしながら速度を上げたり、回す方向を変えたりする。
- ・「ひっぱれ、ひっぱれ！」ここで、幼児の手とともにひもを握り、ボールを引っ張り落とす。「ガタン、ボールが落ちた！」このことは、子どもが自らの自己活動の結果であるかのように思わせるので、子どもたちは非常にうれしがる¹²。

幼児期の第1遊具のボール（Ball）は、万物の象徴（ein Bild vom ALL）であり、万物の似姿であるとしている¹³。子どもは喜んでそれぞれのボールの中にすべての物を見ようと、それぞれの物からすべてのものを作り出そうとする¹⁴。

ボールは、上記のようにボールの適用の方法からさらに展開することができる。自分で投げ捨てたら、自分で投げたボールの行く末をどうするか考えさせ、子どもに始末させ、そのことを内面的に理解させるという側面もあり、自己決定についても考えている。これは、さまざまな経験から、どのような結果になっても心で受け止めるよう、努力させなければならない。また事例のように、子どもたちの生命だけでなく、教育される側、教育する側にも波及していく。

2) 全体の基礎づけ④

知恵（知的なもの）を求めることは、人間の最高の目的であり、自己決定の最高の行為である。自分自身と他人に意識を持ち、自由と自己決定をもって教育することが知恵の自分と他人に対する二重行為である。自己意識をもって、人間の必要性を求め、実現していくことで、至福の生命（生き方）を歩むことができる。

（事例）フレーベル全集第四巻「幼稚園教育学」第十四章 運動遊戯

A 振動する運動遊戯

B ボールから出てきた円環的・回転的な運動遊戯

ひものついたボールからあらわれてきた運動遊戯で、まず、ボールの振動を感じることから始まる。歌いながら動かす。

わたしらも軽やかに動きます

あっち こっち あっち こっち

「わたしら」で、左足をしっかり踏みつけ、右足を少し上げる。

「軽やかに」で、右足をしっかり踏みつけ、左足を上げる。これをリズムカルに繰り返すと上半身があっちこっちと振ったりする。

（中略）

そのあと、腕を振ったり、子どもを持ち上げて、両脚をぶらぶらと振る。

ボールを振り、歌いながら、風車を動かす動作として、腕を回す。

（中略）

ボールが上がったり下がったりしても、いつも中心にいます。

ねえ おねがい

真中を教えてちょうだい

それがよく見えるように

周りを楽しくまわれるように

ひも付きボールを扱った運動遊戯だが、歌に合わせて、足でリズムをリズムカルに取ったり、さらに発展させていく。次に教師が子どもに真中を認識させたら、子どもに真中がどこになるか聞いて立たせてみる。このことは、子どもに真中を理解させ、真中にいる自分と輪の友達と入れ替わりながら、遊びの秩序を理解してもらう。

輪をつくる人数が10人から12人くらいになると、輪の中の一番大きい子が遊戯指導者となり、遊びの指示を出すことになる。このことは、自分でリーダーを意識し、この遊びのルールを理解し、仲間をまとめ、お互いを尊重、認め合うことになると考えられる。このことから、自分と他者との関わりを意識した遊戯である¹⁵。

3) 全体の基礎づけ⑥

教育は、内的なものに基礎を置き、その上に立っている。内的なものから外的なものへ、また逆に外的なものから内的なものへと推し量られる。教育者は、外見だけで判断してはいけない。真理の適用は、細部にわたるまで習熟するよう努力しなければならない。

（事例）フレーベル全集第四巻「幼稚園教育学」 第十四章 運動遊戯「運動遊戯の出発点と進展の課程」

小さいボールは、子どもの活動もしくは保育者の活動によって導かれる。

動いたり 運動したり

行ったり 走ったりできる

ころがったり ころんだり

とんだり はねたり

上がったたり 下がったり

まわったり ゆれたり

円を描いたり 逃げたり

遠くなったり 近くなったりできる

あらわれたり かくれたり

離れたものを結んだりできる

あるところからほかのところへ

小さなボールは動きまわることができる

（中略）

これらのすべてを幼な子はまなび
ボールの中にこれらのすべてを見分けることができる
こうして自分の力を信じることをまなぶ
なんと豊かな生き生きした命を
ボールは子どもにあたえることよ！
しかし両方の命はいつまでも一つの命
たとえ いろいろな形であらわれても¹⁶

保育者が、活動的な保育を行う場合、子どもの活動の中から見てとれる遊びだけをとりえるのではなく、子どもの内面から喜んで遊びをとらえているかを理解しなければならないとしている。また、子ども自身が自分の活動から、活動の意義や方向性、目的を理解し、その上で外へ客観的に表現しているかを順序立てて、決めていくことが重要であると考えられる。

子どもの発達段階に違いがあるが、ボールを転がす、上下させる、また地面にボールがバウンドすることからリズムが生まれ、ボールの扱い方によっては、強い音や弱い音も出てくる。子ども自身が、ボール遊びに夢中になり、ボールの動きから身体で感じるリズム、また音の強弱などを客観的に聞き分け、理解できるように保育者が導くことが重要である。

遊戯がボールを移動させながら遊ぶ旅行遊戯に発展すると、子どもの知的発達過程においては、知力の発達と並行して、歩行力が発達し、遊び空間も広がっていく¹⁷。

4) 全体の基礎づけ⑦

教育、教授、教訓は、受動的であるべきで、命令的、干渉的であってはならない。

(事例) フレーベル全集第四巻「幼稚園教育学」第七章 球と立方体

第二遊具の立方体の遊具を使用する。

動くものを動かしたり、動かないものを子どもの感覚器官に入ってくるように置いたりすることにより、物言えぬ事物にのちに自分から言葉をかけるようになる。すべてのものとともに音や言葉を聴き取ろうとするようになる¹⁸。

さあここにしっかりお立ち！

しっかり、しっかりお立ちなさい！

(あるいは)

さあそこに静かにお立ちなさい！そしておまえを見せてちょうだい。

どうもしないから。わたしたちを信じていいのよ！

立方体はわたしたちの望むとおりにするでしょう。

いまは自分のところにじっと立っています。

(あるいは)

そうね、立方体はじっとしてきたいのよ。

そこから押しやられたくないのです¹⁹。

球と立方体とは、動と静の相対立した物体であり、球は、動きのある表現をするが、立方体は静止した表現と捉えることができる。立方体の遊びを始める前に、球と立方体との違いを正しく理解させるために、立方体を力強く子どもの前に置き、あたかも促すように、また頼むように、立方体に向かって話しかけるように、「さあここにしっかりお立ち！」等、促していく。

このことは、保育者は子どもたちの前に立方体を力強く置き、子どもたちはそのことを理解しようと観察しているが、その際に、決して押し付けるような言葉や従わせるような言葉で子どもたちを誘導するのではないという例に当たる。それは、球と立方体を誘導する方法が違うため、立方体を誘導する際に力強く音を出して球との違いを出したが、保育者の遊具への誘導は、あくまでも促す指示にすぎない。

5) 「全体の基礎づけ⑧」

自己意識の覚醒、そして神と人間の合一的生命の開始、そして、父と子、弟子と師匠の相互理解と共同の生命の開始の後に、はじめて教育が始まる。

(事例) フレーベル全集第四巻「幼稚園教育学」 第十章 子どもの連続的発達とボール遊びの発展

かわいいボールたちよ
位置につけ！
みんなで踊りながら
一つの花輪を編みなさい！
花のように
互いにからみあいながらも
めいめいを見失ってはなりません

この遊びは、子どもたちがボールと一緒に運動しながら、円形を作るなどの共同作業をする活動が子どもたちの気持ちを高揚させる。そして、さらに子ども的人数を増やしたり、壁にボールをぶつける等、遊びのレパートリーを増やしていく。

ポン ポン ポン！
壁からさっと自分で跳ね返れ
私はお前をつかまえない
そしたらわたしはもう師弟だ²⁰

壁を使った遊びを想定しているが、二人以上数人で遊ぶ新しい遊びである。師弟と親方ごっこが当てはまる遊びである。「ポン、ポン、ポン」と皆で歌いながらボールを投げ合うボール遊びをする。ボールを落としたら、単なる候補者になるが、落とさなかったら、どんどん職人、親方と昇格していく。リズムを取り、歌いながら遊びを続けるが、職人と親方という二つの役柄を想定し、お互いの立場を理解しつつ遊ぶことは、人間関係の在り方も学ぶこととなる。

6) 全体の基礎づけ⑨

命令的、干渉的教育が扱う対象は、それ自身に基礎を持つ生きた思想が要求したり、それ自身において真であるものが命令したりするところでは、いわば永遠なものが支配している。それゆえ、永遠なものは、ここでもまさしく受動的、追隨的な形で現われてくるはずである。

(事例) フレーベル全集第四卷「幼稚園教育学」第七章 球と立方体

立方体を使った遊びである。

最も単純な運動として、立方体を振ることである。

子どもと共感させるために子どもの生命や注意や感情をいっしょにおりこんで歌いながら語る。

(第10図) 立方体を振るひもが、ある一面の真中に結び付けられているような位置において振る。

ぶーらん！ぶーらん！
わたしがゆれると
坊やはうれしいね
ぶーらん ぶーらん

(第11図) 一つの稜が底辺の稜に、もう一つの稜が頂点の稜になるような位置で振る。

こんどは一つの稜でぶらさがります
ほらごらん！ —— 長いひもで
楽しくゆれますよ
坊やに近くなったり遠くなったり

(第12図) 一つの角が基点になり、立方体の最も長い対角線が長い軸に見えるような位置で振る。

わたしはひとつの角でゆれますよ
ほら わたしはこんなに長く伸びますよ

今までの遊びが、ボールが中心だったが、次に出てきたものが立方体である。立方体にひもをつけて振り子のように歌いながら揺らす遊びで、いろいろな角度から面が見ることができる。ボールと立方体の形の違いを把握することができ、大きく、また小さく揺らすことで速度の違いが出て、拍子感を感じることもできると考えられる。この相違を見逃さないことが重要である²¹。

7) 全体の基礎づけ⑩

ほんとうの教育、教訓、および教授はすべて、正しい教育者及び教師は、どんな瞬間にも及びどんなことを要求し、規定するさいにも、同時に両端的、両面的でなければならない。すなわち与えかつ取る、結合しかつ分割する、命令しかつ追従する、能動的かつ受動的である、規定しかつ解放する、固定的でありかつ可動的である、ものでなければならない。

(事例) フレーベル全集第四卷「幼稚園教育学」第十三章 第五恩物

これは、立方体を分割して形をつくる作業である。単純な分割から入ると、同じ部分を分け

ていくことになる。分割したのから一つの形に戻る観察力が養われる。

一つの全体 三つの三分の一

三つの三分の一 一つの全体

1	5	5	3	1	1
<small>ひとつの</small>	<small>ぜん</small>	<small>たい</small>	<small>みっつの</small>	<small>さんぶん</small>	<small>のいち</small>
“Ein Ganzes, drei Drittel :					
1	5	5	3	1	1
<small>みっつの</small>	<small>さんぶん</small>	<small>のいち</small>	<small>ひとつの</small>	<small>ぜん</small>	<small>たい</small>
Drei Drittel ein Ganzes”					

上記の歌は、数字譜になっており、言葉や言葉の持つリズム、拍子に、音やメロディが入ると言葉と音楽がより意識的に感じることができる。第五恩物は、立方体でも2分割や、斜めに分割されたものもあり、形の形状を五角形や六角形、その他の形にも変えることができる。また形をつくるときに、四角形は直角を4つもっていることなども学んでいくため²²、誘導する保育者の歌は、立方体を分割、統合する遊びをリズムよく誘導するのにとても重要になってくる。

6. 考 察

「遊びの意義は、遊びを通じて、人生の最高の課題、すなわち、現象のあらゆる変化の中にあっても一つの高い目標を確保するという課題を提示し解決することである。」と記されている²³。

『人間の教育』の教えとフレーベルの恩物であるボールや立方体などの遊具を使った遊びを照らし合わせながら検証したが、事例に挙げた遊びには、必ず歌による遊具への導きがあった。

ボールでは、音の響きを観察する感覚器官を働かせる要素も含んでいる。立方体を使って遊ぶさまざまな分割法は、リズムミクな歌や動きが伴うであろう。

子どもは、保育者と一緒に口ずさみながら歌や言葉を覚えることができるし、遊具の取り扱いによっては、リズム感や拍子感が違ってくことを身体で感じることもできるであろう。

そして、歌を交えた音楽と遊びは身体全体で把握され、さらに遊びを発達させることにより、人間形成に通じることにもつながる。また遊びの精神を通して、子どもの持っている純粹無垢な精神が解放され、豊かな精神へと築き上げられるだろう。また、この遊びは、家庭内にも広がり、兄弟姉妹、近所の友達仲間にも広がりを見せることにもつながる。

遊具への誘導には、保育者、もしくは母親が、歌いながら導いている。母と子、教師と子どもとの音感教育や、リズム教育等について、もっと掘り下げていきたいと考えている。今後の検証課題としたい。

終わりに

今回、フレーベルの『人間の教育』の「全体の基礎づけ」を基に、『幼稚園教育学』の中から、いろいろな事例を探し、その一部を掲載し、検証した。

『人間の教育』は、前半のごく一部を掲載したにすぎない。引き続き、『人間の教育』を読み続

け、『幼稚園教育学』、さらにフレーベルのドイツ学園の教育から、音楽教育をどのように考えていたか、また現代の音楽教育をどのようにしていくべきであるか、今後検証していきたい。

注

- 1 ヨハネス・ブリューナー著、乙訓稔・廣嶋龍太郎訳、『フリードリヒ・フレーベル—その生涯と業績—』東信堂、2011年、p.9
- 2 ヨハネス・ブリューナー著、乙訓稔・廣嶋龍太郎訳、同上書、2011年、pp.1-9
- 3 ヨハネス・ブリューナー著、乙訓稔・廣嶋龍太郎訳、同上書、2011年、pp.11-23
- 4 フレーベル著、荒井武訳『人間の教育（上）』岩波書店、1976年、p.15
- 5 フレーベル著、荒井武訳、同上書、1976年、p.11
- 6 フレーベル著、荒井武訳、同上書、1976年、p.14
- 7 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子訳『フレーベル全集 第五巻』玉川大学出版部、1981年、p.265
- 8 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子訳、同上書、1981年、pp.34-37
- 9 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子訳『フレーベル全集 第四巻』玉川大学出版部、1981年、pp.54-56
- 10 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.37-39
- 11 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、前掲書、1981年、pp.214-219
- 12 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、前掲書、1981年、pp.72-75
- 13 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、p.58
- 14 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、p.78
- 15 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.427-447
- 16 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.380-381
- 17 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.381-383
- 18 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.112-113
- 19 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.117-119
- 20 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.240-245
- 21 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.136-137
- 22 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、pp.322-325
- 23 フレーベル著、小原國芳・莊司雅子、同上書、1981年、p.250